

村上寅次『波多野培根伝』（稿本）に見る 波多野のキリスト教教育¹⁾

塩野和夫

はじめに

200字原稿用紙1254枚からなる村上寅次『波多野培根伝』（稿本）全4巻は、謎に満ちている。「序」と「あとがき」が無いために、筆者の執筆意図や目的を稿本から知ることはできない。奥付も無く公的な執筆年が分からない²⁾。4巻それぞれのタイトルを記していないので、目次も分からない³⁾。

しかしながら、村上寅次が並々ならぬ意欲を長年にわたって持続し、『波多野培根伝』執筆に取り組んだ事実は疑いようもない。杉本勝次は『勝山餘籟－波多野培根先生遺文集』の「序」において、1977（昭和52）年当時の執筆状況を紹介している⁴⁾。

1) 本稿は2012年11月8日に同志社大学神学館1階会議室で開催された同志社大学人文科学研究第1研究会で発表した研究成果を論文としてまとめたものである。

2) 村上寅次『波多野培根伝』（稿本）の執筆意図や目的、執筆年については、以下で考察している。

塩野和夫『継承されるキリスト教教育』231-242頁

3) 目次については、全体と各項目（「章」にあたる）のタイトルは記されている。しかし、全体の構成からすると「部」にあたる各巻に名称がない。便宜上、筆者は内容から推察した仮称を付けておいた。下記の通りである。

第1部（思想の形成）

第2部（天職を求めて）

第3部（新島襄の教育精神継承と同志社辞任）

第4部（西南学院における日々）

参照、塩野和夫、前掲書、135-142頁

……先生の伝記を刊行することも、強く望まれるところである。寂々人間の第一流、これほどの人間の生きざまは、必ずや後世に書き残しておく義務がある。村上寅次君は先生の教え子の一人で既に早くから伝記の編集に手を着けておられ、先生前半生の部分の出来あがった原稿は私も読ませて貰い、その密度の濃い充実した記述に深く感銘し、これが早く完成して世に出る日を待ち望んでおるけれども、いま村上君は西南学院大学の学長として多忙の身、筆がなかなか進まないというのも無理からぬことであろう。

西南学院大学学長・西南学院院長といった重責を担いながら、それでも村上寅次は『波多野培根伝』執筆に取り組み続けた。その理由が問われる。この問いは「村上に取り組みさせ続けた内的動機」とするのが的確であるかもしれない。なぜならば、彼を突き動かした動機は単なる学問的関心を超えているからである。村上が生涯をかけて打ち込んだ執筆作業はもっと深い所から出ている。それは教育者村上寅次を形成し続け、困難な教育状況においては指針となり、彼の全人格の根底に存在したものである。

村上寅次をして『波多野培根伝』執筆に向かわせたものについて、間違いなくいえる一つの事実がある。それは西南学院という教育の現場である。村上はこの場において波多野培根と出会って薫陶を受け、教育者として教壇に立ち、共に学院の責任も負った。波多野の亡くなった後も自らが育てられた原点に絶えず立ち返りながら、彼は『波多野培根伝』執筆に取り組んだ。だから西南学院において波多野から村上へと継承された教育の精神こそ、村上寅次をして執筆作業へと向かわせた原動力なのである。

学院の歴史において継承されてきたものは多くある。しかし、西南学院をして西南学院たらしめている柱はキリスト教教育である。本稿が波多野のキリスト教教育を取り上げる理由もそこにある。

4) 杉本勝次「序」(波多野培根先生遺文集刊行会『勝山餘韻-波多野培根先生遺文集』i-iii頁)

第1章 波多野培根の略歴

(1) 思想の形成

波多野培根は1868（明治元）年6月20日に石見国（鳥根県）津和野に生まれた。父は波多野信務（のぶつよ、通称達枝 [みちえ]）、母は咸（みな、皆子）である。培根は75（明治8）年1月に津和野の広小路小学校へ入学し、80（明治13）年12月に卒業した。12歳である。

波多野達枝は1879（明治12）年10月に鳥根県師範学校津和野分校の漢学教師へと任命されたが、1年足らずで廃校となる。そこで、達枝は80（明治13）年7月、自宅に漢学私塾「淡水舎」を開設した。培根は父のもとで漢学を学ぶ。ところが、82（明治15）年8月に達枝が43歳で亡くなったため、淡水舎は閉じられる。83（明治16）年9月、意を決した15歳の培根は陽明学者である東崇一（澤潟）の澤潟塾（現在の山口県岩国市）に入門する。このように波多野培根がまず学んだのは儒学であり、学問を志ざすことへの基礎的な訓練を受けた。培根が生涯好んだ儒学者である方孝孺（方正学）の漢詩⁵⁾は、教育者波多野培根の根源的な姿勢をよく語っている。

国家使数十年無才智士　　国家数十年才智の士無からしむとも
 国家不可一日無気節士　　国家一日も気節の士無からしむべからず

澤潟塾が1885（明治18）年3月に閉塾されたので、津和野へ帰っていた波多野培根に訪れたのは予想もしなかった転機である。それはキリスト教教育との出会いであった。培根は85年9月に建学の精神としてキリスト教を標榜する同志社英学校に入学した。このような展開をもたらしたのは同志社英学校で学んでいた従兄増野悦興の熱心な奨めである。85年12月17日に欧米巡遊を終えた新

5) 方正学の漢詩は以下で触れている。

村上寅次『波多野培根伝1』稿本、2頁・162頁、村上寅次『波多野培根伝4』稿本、1076頁。参照、塩野和夫、前掲書、169-170頁。

島襄の姿を初めて京都駅で見ている。86（明治19）年6月20日には第二教会（寺町丸太町）でラーネッド（Learned, D. W.）から洗礼を受けて、キリスト教信仰を表明した。88（明治21）年4月からは学生として学びながら、予備校で数学を教え始める。同僚の1年上級には普通部の柏木義円がいた。この年の11月1日に思いがけず、培根は新島襄より来訪を求める直筆の手紙を受け取る。その新島が1890（明治23）年1月23日に療養先の大磯で死去した。24日夜遅く遺体は京都七条駅に移され、学生が交互に棺を担う。棺を担った一人には波多野培根がいたであろう。27日午後1時に同志社校庭で公葬が行われた。式の後、新島襄が培根にあてた遺言を渡される。このように記されていた。

同志社ノ前途ニ関シテハ兼テ談シ置タル通りナリ、何卒将来ハ同志社ノ骨子ノトナリ以テ尽力セラレンコトヲ切望ス

明治二十三年一月二十一日 新島襄⁶⁾

培根は90年6月に同志社普通学校を卒業する。22歳であった。

(2) 天職を求めて

新島襄の遺言を知る同志社当局者は波多野培根を同志社に迎えた。培根は卒業した1890年9月から同志社予備学校と普通学校で数学を担当する。ところが、わずか2年で92（明治25）年7月に同志社を辞任している。彼を突き動かしたのはキリスト教伝道への志であった。

東北地方でキリスト教活動にたずさわった培根は92年8月から酒田（山形県）で開拓伝道に従事した。93（明治26）年12月からは涌谷（宮城県）に転任して開拓伝道に取り組む。94（明治27）年5月に仙台へ移ると、9月から白河（福島県）で開拓伝道を行った。95（明治28）年3月に宮城教会（仙台市）の主任伝道師となり、生活の安定した培根は4月に丸山貞と結婚する。さらに、

6) 村上寅次『波多野培根伝1』稿本、352頁。参照、塩野和夫、前掲書、173頁。

6月には津和野から母と弟習農（しげあつ）を招く。ところが96（明治29）年1月に仙台教会へと所属を変更すると、年末には伝道界を去っている。時に培根は28歳であり、4年余りの伝道活動であった。

教育界に復帰した培根は1897（明治30）年1月から尚綱女学校（仙台）で数学と漢学を教えた。この年の10月31日にただ一人の弟である習農を失う。なお、尚綱女学校の校長ブゼル女史の秘書は培根を西南学院と結びつけるきっかけとなったとされる。98（明治31）年4月からは北海道庁立函館尋常中学校で英語を教えた。11月25日に妻の貞が東京で亡くなる。1901（明治34）年3月に藤田貞子と再婚し、4月から畝傍中学校（奈良県）で英語を教えた。この頃、同志社では波多野培根の母校復帰への要望が高まっている。

牧野虎次の要望を受け、波多野培根は1904（明治37）年9月に同志社普通学校教師に復帰した。ところで、復帰した翌年の05（明治38）年7月に本郷教会牧師である海老名弾正の「同志社は果たして存在の価値ありや」（『新人』第6巻7号、巻頭社説）が発表される。内心穏やかでなかった培根はしかし、覚え書「五年間の沈黙」を記して教育現場で誠実に取り組もうと決意した。8月に普通学校教頭事務取扱になると、着実に学内の改革に取り組んでいる。07（明治40）年1月に、原田助が同志社社長に就任した。そこで、2月に培根は「同志社普通学校整理案 第1号」を原田社長に提出し、7月には「同志社普通学校整理案 第2号」を出している。

ところで、1910（明治43）年8月に海老名の日韓併合論に反対する公開状「明治四十三年八月二十二日（月）、『韓国合併』を報せる新聞の号外を読み、平素強く之を主張せる某氏へ」を書き、国際社会における日本の正義に対する見解を記した。ただし、公表はしていない。結びは以下の通りである⁷⁾。

7) 村上寅次『波多野培根伝2』稿本、638-648頁。参照、塩野和夫、前掲書、178-179頁。

古来、国家の禍機は大抵、正義を蹂躪して獲得せる領土の擴張に眩目酔心せる民衆が逆上して慢心を起し淫々相率て狂態を演ずるの時に胚胎せずや、懸鑒遠からず露西亞にあり（武人、政治を左右するは乱の階なり）知らず足下以て如何となす。

明治四十三年八月二十三日

洛北の一隠士

勝山生

(3) 新島襄の教育精神継承と同志社辞任

同志社大学（神学部・政治経済部・英文科）と同志社女学校専門部（英文科・家政科）が1912（明治45）年4月に発足する。大学について培根は普通学校を改善充実した後に設けるべきであり、内容の伴わない設立は急ぐべきでないと慎重な姿勢を示していた。しかし、大学設立時には「小生は大学開設の公表は漸進論者なりしが、己にレキシントンの砲声を聞きたる今日は比義拳の成立に努力致居候」と記して、従来の立場を柔軟に修正している。

同志社大学開設の1年後に培根は『同志社時報』（第103号、1913年10月25日発行）に「読同志社大学設立趣意書」⁸⁾と発表した。論文で近代国家における私立学校の存在意義を論じた上で、新島襄の二大主張も「自由なる政治教育」と「高尚なる精神教育」にあったと訴えている。最後に「世間是如何なる事を為すも同志社は先生の標準に従ひ名実相応のものを開設して大学と云ふ文字の尊厳を傷つけぬやう深く注意する必要がある」と大学に警告している。主張の底流には大学設立という教育事業の展開期にあたって、新島襄の教育精神に立ち戻り継承していかなければならないという明確な立場がある。

同志社の教育現場に生じた不祥事を解決するために培根は原田助総長と交渉を重ね、1916（大正5）年1月には覚書を提出している。しかし、原田のもとでは教頭職に責任を持たないと判断し、17（大正6）年6月に教頭職の辞職願

8) 波多野培根先生遺文集刊行会、前掲書、95-103頁。村上寅次『波多野培根伝3』稿本、733-760頁。参照、塩野和夫、前掲書、182-184頁。

を出した。原田も9月開催の理事会に辞表を提出したので、学内はさらに対立を深めていく。そのような状況にあっても培根は「解決私案」を作成して、学内の改善を願い奔走していた。しかし、彼を憤激させる事件の発生するに及んで、18（大正7）年1月11日に辞表を提出した。辞任が決まった翌日1月16日に同志社中学校の朝拝式の後で語った培根の告別挨拶は以下の言葉で始まっている⁹⁾。

人誰か母校を愛せざらん、同志社は余の母校なり、されば余は今校門を辞するに臨み、一度顧みて社運の隆盛を祈らざるを得ず、思ふに同志社興隆の眞道は、其教育の特長を發揮し、広く国家社会に貢献して世人の期待に負かざるにあり、……。

(4) 西南学院における日々

同志社を辞職した当時の培根は小型日記帳の裏表紙に覚書「辞職後の問題」3項目をメモしていた。「①学校の善後策（顛末出版及びデビス氏伝翻訳）②静思及び読書（休養の費用）③後図」である。1年後の1919（大正8）年1月に原田総長が辞任して、同志社の紛争は終結した。5月に培根は今後の使命に関して、「予は弘文会なるものを組織し、予の才能及ぶ限りを尽して、通俗的基督教文学（翻訳、著作等）の普及を計らんとす。予の今後の大目的は（其何の業務に従事するに関せず）此弘文会の事業の完成するにあるものとす」と記す。9月には南部バプテストの宣教師ワーン（Walne, E. N.）から要請を受け、福音書店の出版事業を助けるため下関に移り、滞在した。20（大正9）年1月23日には京都で漢詩「師教」（新島先師第三十記念日）¹⁰⁾を記している。

ワーン宣教師の推薦により、培根は20年9月より中学西南学院に赴任し英

9) 村上寅次，前掲書，902-903頁。参照，塩野和夫，188-189頁。

10) 波多野培根先生遺文集刊行会，前掲書，253頁。参照，塩野和夫，前掲書，261-263頁。

語・歴史を教え、礼拝の指導に当たった。当初より中学部寄宿舎の2階にあった舎監住宅に住み、食事は生徒と共にする。1921（大正10）年4月に西南学院高等学部（文科・商科）が発足すると、嘱託講師になった。独逸語研究会を22（大正11）年より始め、44（昭和19）年まで続けている。研究会は斯文会・独逸語研究会などと名称した。22年10月に中学部寄宿舎3階の一室に移る。1923（大正12）年1月に高等学部教授となり、文科1年に西洋史、文科2年に哲学史、文科3年に英語論文の講読を教えた。覚書「三事」¹¹⁾をメモしたのは1924（大正13）年である。1925（大正14）からは文科4年に英語論文の講読を担当した。

水町事件が1926（昭和元）年に起こると、培根と杉本勝次は調停にあたった。27（昭和2）年4月にドージャー（Dozier, C. K.）院長から文・商科長就任の依頼を受けたが、これを断る。日曜日問題が28（昭和3）年に起こる。培根は学生に理事会の回答と趣旨を伝えた。「日曜日委員会」が29（昭和4）年12月に設置される。委員会は翌年5月に答申を理事会に提出した。培根は「理由書」を執筆している。30（昭和5）年9月に培根は高等学部の学生寮（玄南寮）に移った。ボールデン院長辞任問題が31（昭和6）年に起こる。6月に培根は「ボールデン院長留任問題に対する教師一同の立場」を起草した。しかし、7月にボールデン院長は辞任する。培根はこの頃「日曜日競技許諾の問題に関する教師一般の意見（方針決定の一大好機）」を執筆している。

1936（昭和11）年5月11日に開催された西南学院創立20周年記念式典で、培根は勤続15年以上の教員として表彰されている。38（昭和13）年3月に専任教授を退き、嘱託講師となる。理事会は培根に感謝状を贈った。42（昭和17）年3月には名誉教授の称号を受け、44（昭和19）年1月に胸像が完成した。3月には嘱託講師を退く。6月の西南学院精神文化研究所設立に際し、記念講演「基督と愛国」¹²⁾を行った。

西南学院を退いた培根は同年8月15日に福岡から京都の自宅へ転居した。

11) 村上寅次『波多野培根伝4』稿本、1085-1088頁。参照、塩野和夫、前掲書、198-199頁

1945（昭和20）年11月7日に死去している。11月14日に同志社中学校葬が行われ、若王寺山頂にある新島襄墓苑に葬られた。西南学院では50（昭和25）年度から西南学院大学の学年歴に11月8日を「波多野培根先生記念日」として掲載を始める。なお、日にちは1959年度から11月7日に変更された。1951（昭和26）年7月発行の『Seinan Gakuin Today and Yesterday 創立三十五周年記念 1951』（編集者 村上寅次）では表紙の裏にC. K. ドージャーと並んで波多野培根が掲載された。77（昭和52）年12月17日には『勝山餘籟 波多野培根先生遺文集』が刊行されている。

第2章 波多野培根と村上寅次

(1) 西南学院に勤務するまでの村上寅次

村上寅次は1913（大正2）年8月10日に福岡県八幡市（現在の北九州市八幡東区）枝光に生まれた。幼時に父と死に別れたことは、彼の宗教的感性を豊かにする¹²⁾。25（大正14）年4月に地元の八幡中学校に入学した。30（昭和5）年4月には西南学院高等学部商科に入学し、玄南寮に入った。この年の9月に培根が玄南寮に移って来る。以来、3年半に及ぶ玄南寮での共同生活を体験した。キリスト教に対する関心もこの時に深めたと思われる¹³⁾。34（昭和9）年4月に九州帝国大学法文学部に入学し、教育学を専攻した。

九州帝国大学を卒業し、1938（昭和13）年4月より西南学院中学部で教えた。

12) 参照、波多野培根先生遺文集刊行会『勝山餘籟—波多野培根先生遺文集』197-241頁

13) 村上寅次が臨終の父を詠んだ3首に認められる深い情感は、やがて青年期の鋭い宗教的感性へと転換したことを推測させる。

意識なき臨終^{いまわ}の父によりゆきて おづおづ呼べり幼なことばに

みちびかれ湿せる筆を手に持ちぬ いまわの父の唇^{くち}うるおすと

貨物車のとどろき長き夜の更けを 迫りし父が命まもりぬ

村上寅次『歌集 望郷』47-48頁

40（昭和15）年に中国へ出兵，44（昭和19）年には再度招集されルソン島へ出兵した。敗戦により1年間の抑留生活を経験して帰国すると，西南学院に復職した。47（昭和22）年4月には西南学院中学部の教頭となり，併せて西南学院大学商文学科の専任講師として教育原理を担当する。

(2) 村上寅次の波多野培根研究

村上寅次の波多野培根への強い関心が示されるのは，西南学院創立35周年記念事業で編纂された『Seinan Gakuin Today and Yesterday 創立三十五周年記念 1951』¹⁵⁾（1951年7月）からである。彼は編集を担当した。53（昭和28）年2月に西南学院大学短期大学部講師，翌年の3月に西南学院大学短期大学部助教授へと昇任した。59（昭和34）年4月には西南学院大学文学部助教授となり，12月に「波多野培根における儒教とプロテスタンティズム—日本キリスト教思想史の一断面—」¹⁶⁾（『西南学院大学 文学部論集』第6巻，第1・2号）を発

14) 青年期における村上寅次の宗教的感性を表現した短歌がある。

うつせみのなやみを越えていにしへの ひじり 聖人が説きしこれの ふみ 文はも

砕けたる心を神はよるこぶと 知る時しややに心ひらけり

おろかにもわがなやむごと いにしへのひじりもすでになやみたまいし

いにしへのひじりもふかきなげきもて おのれすてしか大きおのれを

村上寅次，前掲書，54-56頁

15) 『Seinan Gakuin Today and Yesterday 創立三十五周年記念 1951』7頁にある「波多野培根先生と掲示板」の無記名の執筆者は村上寅次の可能性がある。

16) 「波多野培根における儒教とプロテスタンティズム—日本キリスト教思想史の一断面—」（以下，「儒教とプロテスタンティズム」と略記する）と『波多野培根伝』（稿本）における研究方法に関して以下の通り比較している。

「儒教とプロテスタンティズム」は経歴を踏まえながらも理論的な考察を行い，そのために培根の経験が背後に退いている。それに対して『波多野伝』稿本は伝記であって，儒教からプロテスタンティズムに移行していく培根の精神性を叙述している。したがって，培根における儒教とプロテスタンティズムをめぐって，「儒教とプロテスタンティズム」と『波多野伝』稿本は補完し合う関係にある。

塩野和夫，前掲書，227頁

表した。村上の波多野研究最初の論文である。

1961（昭和36）年4月に西南学院大学文学部教授へと昇任し、62（昭和37）年1月には西南学院大学教養部長を担当した。12月に『教育的実存とキリスト教—福音の下における教育論—』（ヨルダン社）を出版している。64（昭和39）年1月からは西南学院大学短期大学部長と西南学院舞鶴幼稚園園長を兼任する。67（昭和42）年2月には「波多野培根における『キリスト教と愛国』の問題」¹⁷⁾（『西南学院大学 文理論集』第7巻第1・2号）を発表した。波多野研究2本目の論文である。69（昭和44）年9月に学校法人西南学院理事の一員となり、76（昭和51）年12月からは西南学院大学学長を務めた。

3本目となる波多野研究の論文である「新島襄と波多野培根—明治教育精神史の一断面—」¹⁸⁾（『西南学院大学 児童教育学論集』第3巻第1号）を発表したのは、1977（昭和52）年3月である。この年の12月には、刊行会の委員として『勝山餘籟—波多野培根先生遺文集—』を発行した。同書では「解説」として村上の2論文「波多野培根における儒教とプロテスタンティズム—日本キリスト教思想史の一断面—」「波多野培根における『キリスト教と愛国』の問題」を取りあげている。

17) 「波多野培根における『キリスト教と愛国』の問題」（以下、「キリスト教と愛国」と略記する）と『波多野培根伝』稿本の補完関係に関しては以下の通り指摘している。

「キリスト教と愛国」は伝記的要素を含んでいるが、全体としては理論的な構成を持つ。したがって、培根におけるキリスト教と国家をめぐって、異なった手法による「キリスト教と愛国」と『波多野伝』稿本は補い合っている。

塩野和夫、前掲書、227頁

18) 「新島襄と波多野培根—明治教育精神史の一断面—」（「新島襄と波多野培根」と略記する）と『波多野培根伝』稿本の相違と補完関係について以下の通り指摘している。

「新島襄と波多野培根」は歴史的な研究方法を用いている。したがって、「新島襄と波多野培根」と『波多野伝』稿本は基本的に同じ手法である。ただし、「新島襄と波多野培根」が培根におけるキリスト教教育精神史に焦点を合わせた研究成果であるのに対し、『波多野伝』稿本は全体像を描き出している。このような描写における強調点の違いによって、両者には補完し合う関係がある。

塩野和夫、前掲書、227頁

1977年12月頃に村上は「先生前半世の部分の出来あがった原稿」を杉本勝次に手渡ししている。それは村上『波多野培根伝』（稿本）の第1部・第2部・第3部にあたると推定される¹⁹⁾。80（昭和55）年4月からは西南学院院長と宗教局長事務取扱を兼務した。西南学院大学を定年退職したのは84（昭和59）年12月である。86（昭和61）年以降、村上は『波多野伝』（稿本）の第4部を書きあげた。しかし、これは彼の構想を完成させた作品ではないと考えられる²⁰⁾。89（平成元）年には妻村上弘子の看病に専念するために、西南学院理事長を辞任した。『歌集 望郷』を1996（平成8）年に出版し、この年の8月に召天している。

第3章 キリスト教教育者 波多野培根の構造的理解

(1) 二等辺三角形という構造

キリスト教教育者としての波多野培根は、二等辺三角形という構造によって理解できる。底辺の2点には研究活動と義の追求がある。この2点に基礎付けられて、教育現場におけるキリスト教教育はあった。

研究活動の持続的な取り組みは、キリスト教教育の内容を充実する。他方、義の追求は教育現場に規律を与えただけでなく、近代天皇制が強化されていく時代にあってキリスト教教育の土台を強固にした。ところで、儒教を学んだ少年期に二等辺三角形という構造の萌芽を見ることができると。同志社においてもこの形態でキリスト教教育を追求したが、多忙のため充実させられなかった。

19) 参照、塩野和夫、前掲書、231-242頁

20) 当初、村上寅次が構想していた『波多野培根伝』は以下の通り推測されている。

第1部 思想の形成

第2部 天職を求めて

第3部 新島襄の教育精神継承と同志社辞職

第4部 五十歳代の旅立ち

第5部 西南学院における波多野培根

第6部 キリスト教教育を死守する波多野培根

参照、塩野和夫、前掲書、242頁

二等辺三角形という構造で安定してキリスト教教育に従事した教育現場は西南学院である。

(2) 培根の研究活動

村上寅次『波多野培根伝』稿本は同志社時代の研究活動にほとんど触れていない。それでも、「21 カーライルへの傾斜」²¹⁾に掲載されている「因信而有望」（『同志社時報』第120号、1915年5月）はカーライル理解の的確さと思想の本質に迫る鋭さを示している。

研究計画の全体像が明らかにされるのは「24 辞職後の日々」²²⁾においてである。小型日記帳の裏表紙に書かれた「辞職後の問題」の「②静思及び読書」とそれに対応するメモ（18年5月27日）に研究テーマと読書計画が記されていた。以下の通りである。

哲人ソクラテス トマス・アーノルド伝 ペスタロッチー伝 デビス伝 （大儒朱熹 及其感化） 希伯来民族史（サンダース） 基督伝，黙示録及但以理（ダニエル）書註解 読経餘録
--

カント，実践理性批判（仏訳参考） クーザン，眞美善論（英訳参考） マチニー，人間本務論附マチニー伝 フィヒテ，天職論（独和对訳）（英訳参考） デュペロア，カントとフィヒテ（教育問題） （ヒルチ，黙想録）。（ロバートソン説教集）。 Farfar's Seekers After God（1869） （Seneca, Epictetus, marcas Aurelius）

21) 「21 カーライルへの傾斜」（村上寅次『波多野培根伝3』稿本，796-814頁）

22) 「24 辞職後の日々」（村上寅次，前掲書，939-955頁）

メモの前半はギリシャ・ヨーロッパ・中国の哲学者や教育者、ヘブル民族史とキリスト教思想など関心のあるテーマを幅広く並列している。後半はカントやクーザンなどの原書を取り上げ、これらを精読していったと思われる。いずれにしても校務に忙殺されていた同志社を辞職して与えられたしばらくの時間を読書に没頭していた様子が読み取れる。

西南学院に勤務すると培根の研究活動は充実し多様な姿を見せるようになる。キリスト教教育者として希望した彼本来の研究活動は福岡において展開した。研究活動に欠かせない文献の収集に関連して古書店の店主は印象深く記憶していた²³⁾。

先生は実に変わった方でしたね。毎月俸給日が来ると必ず私のところへみえて書物を買われました。本当に書物が好きな方だったですね。

培根を主要メンバーとする共同研究—斯文会とも獨逸語研究会とも呼ばれた—は、22（大正11）年から44（昭和19）年まで22年間続けられた。研究会に参加していた杉本勝次の証言²⁴⁾は研究者である波多野培根の一面をよく語っている。

謹厳寡黙な先生は自身のことを語られることは滅多にないので、先生の学殖博識は、こちらから叩かねばその底は知れなかった。学は東西に互り、その語学の強さは抜群であった。五、六人か六、七人で読書会をもち、カーライルやカントのものなどを論読したのに、そうした折に示された先生の英語・独逸語の読解力の確かさに、私は真に驚嘆した。先生は、ギリシャ語・ラテン語・ヘブル語などにも精通しておられた。自分ではおっしゃらないけれども、フランス語なども読まれていたと思う。どうしてあれだけの学力を蓄積されたのだろうと、感じ入ったことである。読書会は会員の家を順番に

23) 村上寅次，前掲書，1070-1071 頁

24) 波多野培根先生遺文集刊行会，前掲書，序，村上寅次，前掲書，1113-1120 頁

まわった。先生は福岡にいらした間、ずっと西南の寄宿舎の一室での独り住みであられたが、先生のお部屋にお邪魔をする時、壁一杯の大きな書棚には何百冊もの和漢洋の書物が整然と置かれ、ロンドン・タイムズなどもキッチンと少しの乱れもなく整理整頓されていたこと、そして、お部屋には机が二つあって、一つの机は『聖書』を読むためだけの特別のものであったこと、尚、読書会はいつも二時間以上に互ったが、そうした時、畳の上の場合は、二時間でも三時間でも先生は正座を崩されなかったこと等々、今でも目に見えるようである。

27（昭和2）年8月29日に培根が京都の自宅で開いた「王陽明先生四百年記念小会」は儒学と西洋哲学を統合した研究内容の一面を語っている。その時、培根の行った講話のメモ²⁵⁾が残されている。

道学者及び其精神（八月二十九日、陽明四百年記念小会）

（一）陽明学と朱子学

陽明学の人々が朱子学の弊として指摘せる点。

- ①格物窮理の弊は、外物拘泥（誠意と云う根本を離る）、支離滅裂（無統一）となる。
- ②先知後行の弊は、知と行とが分離

（二）陽明学とフィヒテ学

その類似点

致良知……王陽明

良心服従…Fichte

西南学院における研究活動は、培根の精神活動の根底にあった儒教研究の排除を意味しなかった。キリスト教と近代ドイツにおける人間精神の研究が調和

25) 村上寅次、前掲書、1112-1128頁

をもって受けとめられていたように、培根の全人格において儒教・キリスト教・近代ドイツを対象とする研究は整合性を持っていた。この真実は一方で近代日本における日本人の思想形成に重要な意味を示唆する。他方、日本人の精神的伝統とキリスト教が調和した培根の立場は戦前・戦中の福岡に西南学院が根付いていく上で重要な契機を持っていたと考えられる。

(3) 追求した義

研究活動と並んでキリスト教教育を支えたもう一点は、義の追求である。義は培根が生涯を貫いて追求した倫理的規範である。

同志社時代に日本国の義を強く自覚させられる出来事が起こった。日本の韓国併合である。1910（明治43）年8月に「日韓併合ニ関スル条約」が結ばれた。その時にあたり、かねてより日韓併合を主張していた海老名弾正への公開質問状という形式で、培根は自らの主張を明らかにした。見解が述べられている第2段落は以下の通りである。

少数、曇れる良心の眼＝足下も人間に良心のある事を信じ居らるゝならん＝を拭ひて最近十五年間の出来事を一瞥せん、明治二十七年八月、日清開戦の御詔勅、同三十七年二月、日露開戦の御詔勅、其他、同年同月締結の日韓議定書を初とし機会ある毎に日本国が全世界に聲明したる

韓国独立、領土の保全云々

の堂々たる大文字、光明を日月と争ふべき大宣言は此度の一舉に由りて全く空言空語と化せしのみならず、日本は事実にて正義人道の美名の下に恐るべき禍信を包蔵して吞噬侵略を行ふ陰險国と墮落し、新に世界の虎狼国の仲間入りを為したるを思へば、実に国家の為に漸墳痛恨に堪へざるものあり、従来、仁義を標榜して常に列強国の野心を痛罵せる日本人の口は今後、自己の身を呪詛せざるを得ざるに至れり、嗚呼、何たる一大恨事ぞや、知らず日本国は世界を首肯せしむべき如何なる正大の理由に頼りて韓国の合併を行はんとするものぞ、思ふに近日に発布せらるべき韓国併合の宣言書が光輝なき気焰なき平凡文字の羅列たるべきかは今より想像するに難からず²⁶⁾。

一連の主張の中で「良心の眼」「正義人道」「仁義を標榜」「正大の理由」など、義に連なる概念を用いて韓国併合が道理に背く事実を述べている。義は培根に善悪を判断させる基準であり、それは個人的な生き方だけでなく国家の政策にまで及んだ。

教育現場でも義を教えた。たとえば、陸軍大将大山巖が16（大正5）年12月10日に死去し、葬儀が国葬として12月17日に行われた。葬儀の前日16日に培根は同志社中学校のチャペルで大山公の生き方と武人の義について講演している。結びは次の通りである。

「第一に、日露戦争に於る大山公の勲功（満州軍総司令官として）をあげ、併せて「日露戦争の意義」と記している。第二に、「私人として」、①政治に関係せず、軍人の本領を守る ②党派を造らず（薩閥を固めず：大山は鹿児島藩士） ③品行方正（私行上非難すべきことなし） ④不動、山の如し」²⁷⁾

培根は軍人として節度を保った大山巖の生き方を高く評価した。このような判断は軍人が社会的に大きな影響力を持っていた教育現場にあって、学生への重要な示唆となったであろう。

20（大正9）年1月に海老名弾正は同志社の次期総長に選出された。知らせを聞いた培根は厳しく海老名の義を問い、漢詩「聞海老名某同志社總長就任之報」²⁸⁾で追求している。彼がまず問題にしたのは海老名の言葉である。それは「詭辯縦横」であって、わずかな「誠」すらない。昨日までは同志社の「解散」を論じていた海老名が、今日はそこに「天職」があると言う。まさに「詭辯」である。彼は同志社「總長」の名を瀆している。言葉に真実がない同志社では牧師の「清影」さえ薄くなってしまふ。学びの園における「松籟」は「鬼哭」の声を発し、「彰榮燈」さえ暗くなってしまふ。26（大正15）年7月に総長の3選を迎えた海老名に培根は質問し、その日の日記に記している。

26) 村上寅次『波多野培根伝3』稿本、633-648頁。参照、塩野和夫、前掲書、251-252頁。

27) 村上寅次、前掲書、829-830頁。参照、塩野和夫、前掲書、252-253頁。

余の語りし所を或は喜ばざる者ありしなるべし、然し余は神に対し、新島先生の霊に対し、同志社に対し、又我が良心に対して、己の為すべきことを為し、言うべきことを言いたりと感じて、衷心に深き慰安と喜悅とを感じたり²⁹⁾。

44 (昭和19)年6月3日に西南学院の精神文化研究所設立を記念して培根が行った講演「基督と愛国」³⁰⁾で全面的に展開したのも義である。義の追求は彼のキリスト教信仰とキリスト教教育に一貫していた。それだけに戦前・戦中におけるキリスト教教育を支える一点となり得たのである³¹⁾。

第4章 波多野培根のキリスト教教育

(1) 同志社におけるキリスト教教育

波多野培根のキリスト教教育には、復職後の同志社在任期(1904-1918)と西南学院在任期(1920-1944)で力点の置き方に顕著な違いが認められる。まず、同志社在任期を検討する。

28) 村上寅次『波多野培根伝4』稿本、1026-1027頁。参照、塩野和夫、前掲書、253-254頁

29) 村上寅次、前掲書、1139-1142頁。参照、塩野和夫、前掲書、254頁。

30) 波多野培根先生遺文集刊行会、前掲書、197-241頁。

31) 波多江俊一は創立35周年を記念して開催された座談会で戦前・戦中の緊迫した状況で西南学院における波多野培根の独特の存在感について語っている。

私が入学したのは昭和十五年の四月で、支那事変も相当進んでいた頃でした。一年経って十六年の春にはドーチャー先生一家はアメリカへ引揚げられ、日米関係も切迫した頃であったし、特に西南学院に対する圧迫も強くなって、落ちついて勉強出来なかった。自然学生々活も無味乾燥で面白くない様になり、学校なんか止めてしまつて家に帰ろうか、と云う者もあったが、「波多野バイコンさんのござるけん」と云つてやめなかったですね。それ程波多野培根先生の学生に対して与えられた影響は大きかった。あの何にも信ずる事の出来ないような、混乱した緊迫した時代に我々学生は眞から波多野先生を信じ、尊敬しておりました。

『Seinan Gakuin Today and Yesterday 創立三十五周年記念 1951』13-14頁。

培根が1905（明治38）年6月までに記したメモ³²⁾や07（明治40）年頃に記したメモ「明治三十八年九月以来、カラ尽シテ矯正整理シアル点」³³⁾、さらに07年に同志社社長に就任した原田助に「十年ヲ要スルガ如シ」として提出した書類³⁴⁾はいずれも学内行政や風紀の取り締まりに重点を置いていて、キリスト教教育に関する詳細な言及はない。ところが、その頃から同志社の内外で専門学校令による大学昇格を目指す運動が高まる。同志社が大きく変革しようとする時にあたって、培根は原点に立ち戻りキリスト教教育を考察した。こうして、09（明治42）年8月に書いたのが「同志社創立者ノ二大主張」³⁵⁾である。

- 第一主張 同志社大学ハ私立ナルベキコト、
- 第二主張 同志社大学ノ徳育ハ基督教主義ナルコト。

同志社のキリスト教教育に関する検討はさらに続き、「読同志社大学設立趣意書」³⁶⁾（『同志社時報』103号、1913年10月）を発表した。論文では同志社大学の「存在の理由」として「(その一) 自由思想の養成」と並べて「(その二) 基督教主義の徳育」を取りあげて論じている。

同志社在任期における教育者としての培根の姿勢を意外によく伝えているのが学生の声である。加藤延雄は「彼（培根）はもちろん同志社の伝統的精神である基督教主義を強く明瞭に打ち出し、よい礼拝を行うことを心がけ、先ず礼拝出席と静粛に重点をおいた」³⁷⁾としている。品川義介は印象的に培根の一面を「何たる悪日か、此の一事が翌日、卒業式前に波多野先生の耳に這入ったからたまらない。性来の硬骨病は先生の怒りを忽ち爆発せしめ、直ちに何等か暇

32) 村上寅次『波多野培根伝 2』稿本 541-543 頁。参照、塩野和夫、前掲書、272-273 頁。

33) 村上寅次、前掲書、563-564 頁。参照、塩野和夫、前掲書、273-274 頁

34) 村上寅次、前掲書、579-583 頁。参照、塩野和夫、255-257 頁。

35) 村上寅次『波多野培根伝 3』稿本、677-681 頁。参照、塩野和夫、前掲書、259 頁。

36) 波多野培根先生遺文集刊行会、前掲書、95-103 頁。村上寅次『波多野培根伝 4』稿本、733-760 頁。参照、塩野和夫、前掲書、259-261 頁。

37) 村上寅次『波多野培根伝 2』稿本、601-602 頁。参照、塩野和夫、前掲書、177 頁。

惜する所もあらばこそ、断々乎として全部退学を命じてしまった。泡を喰ったのは世間並の社長閣下其の人である。多少の手加減を強要したが、其所は正義を踏んで怖れざる先生の事である。更に効目がない。小気味よくも其の凡てを一蹴してしまった。為めに折角の大卒業式も白け切った訳であるが、此の至誠を含んだ先生一流の果敢決行は全校の反省を促した³⁸⁾と伝えている。吉岡義睦は培根の違った一面を「それでいて先生は大変思いやりの深いやさしい半面を持っておられたのは不思議である。私も先生のそんな半面には全然気がつかずにいたが、ある時先生の私宅へ来いとのこと、又何か叱られるのかとびくびくしながらお宅を訪ねると、学校で見たこともない笑顔をもって温情のあふれたご馳走を並べられ、『いつも君には気を使わせるが、今日は鐘のことは忘れてしまってくつろいで下さい』と言われて、私は思わず熱い涙がこぼれたのを今なお覚えている³⁹⁾と追憶している。本田虎雄は教師の思い出にも触れ、「中堀愛作先生は、地方の公立学校に務めて居られたが、同志社からの招きを受けられてご就任の時に、波多野先生は厳肅に、『同志社では生徒を信用しております。公立学校とは違います。どうか生徒を信用して教育をしていただきたいです』とおっしゃって、思わず背筋がひやりとしたと、当時を回想しておられた⁴⁰⁾と記している。

(2) キリスト教教育の原点

1918（大正7）年1月に同志社を辞職した培根は自由と不安が表裏をなす2年半程を送った。その間に、福音館書店店主ワーンの招きで19（大正8）年の後半は下関壇ノ浦で過ごし、20（大正9）年初頭には京都に帰っている。そして、1月23日を迎えた。新島襄の30年目の記念日である。この日の朝に若王寺山の墓苑を訪ねた培根は新島襄の墓前に立った。その時にこみ上げてきた思いを記したのが、「師教（新島先師第三十記念日）」である。

38) 村上寅次，前掲書，606-609頁。参照，塩野和夫，177頁。

39) 村上寅次，前掲書，612-617頁。参照，塩野和夫，177頁。

40) 村上寅次，前掲書，625頁。参照，塩野和夫，前掲書，178頁。

師教（新島先師第三十記念日）

師教懇篤猶存耳
回顧當年涙満臉
黽勉須磨魂一片
神光未普照皇州

師教 懇篤にして 猶 耳に存す
當年を回顧し 涙 臉に満つ
黽勉して 須らく磨くべし 魂一片
神光 未だ普ねく 皇州を照さず

（新島先師之句三四転用）

1月23日の朝、培根は一人で新島襄の墓前に立ち祈りを捧げたに違いない。「師教 懇篤にして 猶 耳に存す」とは、墓前で彼の全身にこみ上げてきた真情を表現している。だからあの時の培根は30年前の感受性に富んだ若い心に立ち帰っていて、新島襄の語りかけた一言ひと言がその心に響いていた。新島の言葉は30年経っても培根の心を打ったからである。だから、「當年を回顧し」のである。すなわち一方ではあの日の経験に自己を投入しながら、現実に立ち帰ることによって「當年を回顧」した。他方、感動に震える心を抱えつつ、「涙 臉に満つ」と告白する。その上で、「黽勉して 須らく磨くべし 魂一片」と初心に立ち帰って修学への志を述べる。勉学に励み、魂を磨く。それは師の教えを受けた者として、為すべき業であった。しかも、「神光 未だ普ねく 皇州を照さず」という新島の教えた現実がある。師によると、己の修学は自分一人の問題ではない。日本の国を照らすために、一遇を照らす光となるべく励まなければならない。これが若王寺山における培根の精神的な経験であった。

「師教（新島先師第三十記念日）」を書いた培根は同志社在任中とは明らかに違った場に立っている。同志社で彼は多くの課題を抱え取り組んでいた。辞職後もしばらくは責任感が脳裏を離れることはなかった。しかし、同志社を止めて1年が経ちしばらくを下関で過ごしている間に、多くの囚われから彼は解放されていた。だから1月23日に新島襄の墓前に立った時、30年前に新島から薫陶を受けた日々が昨日の出来事のようによみがえり、彼を捉えずにおかなかったのである。キリスト教教育の原点に立ち戻された経験は西南学院におけるキリスト教教育の取り組みを特色づけていく⁴¹⁾。

(3) 西南学院におけるキリスト教教育

1920（大正9）年9月に西南学院に奉職した培根は、24（大正13）年9月に記した「三事」⁴²⁾（以下、「三事（1924）」と記す）で自らの使命を自覚している。3年後の27（昭和2）年9月6日付の覚書に残した「三事」⁴³⁾（以下、「三事（1927）」と記す）、「三事（1924）」と「三事（1927）」の内容に準じて1936（昭和11）年5月に記した覚書「予が十六年間勤続中聊か西南学院のために盡くしたりと思う点」⁴⁴⁾がある。ここでは内容が最も充実している「三事（1924）」によって西南学院における培根のキリスト教教育について検討する。「三事（1924）」は以下の通りである。

三事

①歴史（欧州近世史）

欧州に於る近世の強国の盛衰消長の顛末を教へ、併せて日本民族の世界に於

41) 塩野和夫, 前掲書, 261-263 頁

42) 村上寅次『波多野培根伝4』稿本, 1085-1087 頁

43) 「三事（1927）」は以下の通りである。

- 1 哲学 唯物論又ハ不可知論＝精神哲学（有神論）
- 2 信仰及道德 合理派, 自由派＝正統派（超自然主義）
功利, 実用…直覚, 道義（良心）
- 3 国家 有ゆる形式のデモクラシー＝皇室中心主義

村上寅次, 前掲書, 1102 頁

44) 「予が十六年間勤続中聊か西南学院のために盡くしたりと思う点」は以下の通りである。

- 1 学問……カーライルの哲学（理想主義）
西洋史, 獨逸語（自由主義及立憲主義）
- 2 信仰……聖書本位の福音的キリスト教宣布
チャペル集会 基督教主義教育の高調
- 3 国民精神…皇室中心, 君民一体の国民思想
（進歩的国民主義）の鼓吹
- 4 学院の秩序維持 三四の扮憂
 - 一. 水町氏事件
 - 二. ドージャー院長事件
 - 三. ボールデン院長留任事件

村上寅次, 前掲書, 1153-1154 頁

る位置を明にし以て健全にして博大なる国民的精神を学生の心に涵養することを務む。

②哲学（哲学史）及び論文

古今の大哲学者の世界観及び人生観の一斑を教へ、唯物思想の浅薄偏狭にして取るに足らざるのみならず道德上、極めて有害なることを明にし、以て健全且つ廣汎にして深味ある精神的人生観の理論的背景を学生の心に扶植することを務む（哲学史及び文明史、補足の意味にて、カーライル及び其他の精神学派の人々の筆になれる論文を購読す）。

③聖堂（禮拜）

チャペルの集會を規則正しく行ふことに依りて学生の信念涵養の機會を作ると共に福音的基督教に準拠して信仰の正脈を明にし以て彼等の純真なる信念と堅実なる品性とを養成することを務む。

予が西南学院に於る仕事は外面上、種々に分かるべきも、是等を一貫する内面の趣旨は、要するに前記の三事実行する事に外ならじ、而して之を実行することに依りて聊かにても学院の發展上に貢献することを得ば予が願足る。

培根の西南学院におけるキリスト教教育は、第1に「聖堂（禮拜）」を主要な柱とした。「チャペルの集會を規則正しく行ふこと」を務め、チャペルを「学生の信念涵養の機會」として、「彼等の純真なる信念と堅実なる品性とを養成すること」を目指した。第2は培根の研究活動との関わりである。「歴史（欧州近代史）」と「哲学（哲学史）及び論文」は、西南学院で日常的に取り組んでいた研究活動が背景にある。彼は自らが学びつつ「歴史（欧州近代史）」と「哲学（哲学史）及び論文」を教えた。第3にあくまで教育現場にこだわる、いわば現場主義を指摘できる。かつて同志社でしていたように学内行政に関わることもなく教育理念だけを教えるのでもなく、西南学院において培根は教育現場を重んじてそこで学生と共に過ごし、チャペルや講義を通じて育ちゆく彼らを誇りとし喜びとしたのである。

おわりに

波多野培根のキリスト教教育にとって、同志社時代（1904-18）から西南学院時代（1920-44）への展開点となり両者を結ぶ結節点ともなったのが、1920（大正9）年1月23日の新島襄墓前での出来事である。なぜ、あの日の出来事はそれほど重要な意味を持つ出来事となったのか。「師教（新島先師第三十記念日）」が明快にその答えを提供している。培根はキリスト教教育によって育てられた人物である。だから、新島襄によって人格を形成された日々はキリスト教教育者 波多野培根の原点となった。同じことが村上寅次にもいえる。村上もキリスト教教育によって育てられた人物である。だから、あれほどの熱心さを持続して『波多野培根伝』執筆に取り組んだのである。

ところで、培根における同志社時代と西南学院時代では、チャペルに対する熱心さという共通点は認められるものの、相違点が際立っている。彼が07（明治40）年頃に書き残したメモ「明治三十八年九月以来、カラ尽シテ矯正整理シタル点」⁴⁵⁾は次の通りである。

○三大欠点

- (1) 生徒数ノ少ナキコト
- (2) 設備ノ不十分ナルコト
- (3) 校舎ノ不潔乱雑ナルコト

○四大悪事（学風ノ弛廢）

- (1) 無届欠席ノ多キコト
- (2) 試験ノ不正行為頻繁ナルコト
- (3) 学費及ビ食料ノ納入法、其敷乱レオルコト
- (4) 不良学生ノ（比較的）多キコト

45) 村上寅次『波多野培根伝2』稿本，563-564頁

「三大欠点」「四大悪事」を「カラ尽シテ矯正整理」するために必要なのは、学内における義の追求に違いない。同志社でのキリスト教教育では二等辺三角形の一方の点である「義の追求」に重きが置かれた。他方、西南学院において取り組んだ「歴史（欧州近代史）」と「哲学（哲学史）及び論文」の講義や指導で重要なのは日常の研究活動である。これもキリスト教教育を支えるもう一方の点である。

培根のキリスト教教育を支えた二等辺三角形の強調点の変化は、同志社における学内行政から西南学院における教育現場という重点の移行と対応している。ところで、学内行政と教育現場の関係をどのように考えるべきなのか。両者は個々の教育者にとって重点の置き方が違ったり、変化することもある。しかし、キリスト教学校の総体においては互いに補うものであって、いずれも否定されることにはならない。学生を育てるためには学生の指導と教育の充実のいずれもが欠かせないからである。その意味で波多野培根の二等辺三角形は普遍化されて、キリスト教学校における教育現場を検討する上で今日も有効性を持つと考えられる。

最後に波多野培根研究の課題と可能性について言及しておきたい。彼は同志社で育てられ、同志社と西南学院で教えた。この事実はキリスト教教育者波多野培根研究の個別性と普遍性を語っている。つまり、同志社は母校で教えただけでなく西南学院でも人を育てた波多野を研究対象とすべきである。各地で活躍した同志社人を研究対象とすることによって、キリスト教教育の普遍性が明らかにされるからである。西南学院はまず村上寅次『波多野培根伝』全4巻の刊行という責任を果たすべきであろう。その上で村上が果たせなかった課題、すなわち村上寅次『波多野培根伝4』を修正加筆して、『波多野培根伝4－五十歳の旅立ち』『波多野培根伝5－西南学院における波多野培根』『波多野培根伝6－キリスト教教育を死守する波多野培根』を完成させるのである。